

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題(和文)	自由産出調査から見る形容詞および形容動詞と名詞の共起表現 - 学習者と母語話者の対照を通して -
Title(English)	
著者(和文)	曹紅セン, 仁科喜久子
Authors(English)	HONG QUAN CAO, KIKUKO NISHINA
出典(和文)	電子情報通信学会, Vol. 106, No. 363, pp. 31-36
Citation(English)	, Vol. 106, No. 363, pp. 31-36
発行日 / Pub. date	2006, 11
URL	http://search.ieice.org/
権利情報 / Copyright	本著作物の著作権は電子情報通信学会に帰属します。 Copyright (c) 2006 Institute of Electronics, Information and Communication Engineers.

自由産出調査から見る形容詞および形容動詞と名詞の共起表現 —学習者と母語話者の対照を通して—

曹 紅荃[†] 仁科 喜久子[‡]

[†] 東京工業大学大学院博士課程 [‡] 東京工業大学留学生センター

〒152-8550 東京都目黒区大岡山 2-12-1

E-mail: [†] cao.h.aa@m.titech.ac.jp, [‡] knishina@ryu.titech.ac.jp

あらまし 本稿では、中国人日本語学習者と日本語母語話者を対象に行った共起表現の産出調査のデータを分析した。産出された表現の延べ数も異なり数も学習者より母語話者のほうが多い。名詞別の産出量に関しては、学習者も母語話者も具体名詞より抽象名詞の連想結果の異なり数が多い傾向がある。一方、名詞の概念分類によって、学習者と母語話者の間で産出表現異なり数の差の大きい語も多い。具体例から学習者と母語話者はそれぞれ異なる特徴があり、連想結果は文化の影響を反映することがわかった。学習者の誤用を「共起、造語、漢字の移用、文化・文学、品詞の誤り、使用制限、「的」語の誤り」の7パターンに分けられ、誤用から「視覚的な処理を優先する」という学習者のストラテジーを発見した。

キーワード 共起表現, コロケーション, 連想, 誤用, 形容詞, 形容動詞

An Analysis of Japanese Adjectival Collocations Within Learners and Native Speakers:

—results from a collocations production survey—

Hongquan CAO[†] Kikuko NISHINA[‡]

[†] [‡] Tokyo Institute of Technology 2-12-1 Ookayama, Meguro-ku, Tokyo, 152-8550 Japan

E-mail: [†] cao.h.aa@m.titech.ac.jp, [‡] knishina@ryu.titech.ac.jp

Abstract A collocation production survey, consisting of 70 basic Japanese nouns, was administered to Chinese learners and native Japanese speakers, in order to investigate the quantitative and qualitative differences in collocations produced by the two groups. More collocations both in terms of tokens and types were produced by the native group, while more collocation types were produced for abstract nouns compared to concrete nouns. Differences in the collocations produced by the groups varied widely according to semantic domain, reflecting cultural differences between the groups. Collocation errors produced by the learners were classified according to seven types: lexical errors, non-word errors, inappropriate kanji, literary or cultural usages, word class errors, usage restrictions, and suffixation errors. Some of these errors indicate that the learners prioritize visual information in their language study.

Keyword Co-occurrence, Collocation, Association, Error, Adjective

1. はじめに

学習者の産出した第二言語には、母語話者なら用いないような語と語の組み合わせがあるため、不自然になってしまうことがある。語と語の組合せは、コロケーションと呼ばれることがあるが、コロケーションはまだ明確な定義がないため [8]、本研究では「共起表現」と呼ぶことにする。ここでいう共起表現とは、広い意味の「共に出現するもの」ではなく、一文中に見られる統語的な関係がある単語間の慣用的な組合せを意味する。例えば、「つめたい水がほしい。」という文の中で、「つめたい水」と「水がほしい」はそれぞれ共起表現になる。

筆者らはこれまで、中国人日本語学習者の作文を利

用し、形容詞および形容動詞と名詞との共起表現に焦点をあてて、学習者の習得状況及び問題点を解明した上で、教育への提言を行った [4]。しかし、作文中の共起表現は数に限りがあることから、学習者表現の全体的な傾向を把握するために、より大量な共起表現データが必要であると考えられる。本稿では、中国人日本語学習者と日本語母語話者を対象に形容詞および形容動詞と名詞との共起表現に範囲を絞り、産出調査を行った。これからは、調査の概要を説明した上で、まず調査結果の中で、学習者と母語話者の共起表現の異同を例によって示す。次に学習者の産出した共起表現数を提示し、誤用のパターンを抽出する。これによって、学習者の習得に影響を与える問題点を発見する。

2. 先行研究

語彙知識について、Nation(2001)は、語の使用の一側面としてコロケーションを正しく使うことが大切だと述べている。また語の意味の下位区分として連想が挙げられ、語彙は連想によって心中で語のネットワークを作っていると考えられると述べている。英語の語彙習得について、投野(1997)は、語と語の結び付きは単語の用法の一つで、語と語の結び付きはコロケーションの問題だと述べ、英語の語彙習得においてコロケーションを英語と日本語対訳の形式でテストすることを提案している。日本語の語彙習得について、松本他(2006)は、「L2 学習者の語彙知識は母語話者のそれと比べて、量的にも質的にも異なる」と述べ、また「L2 学習者は共起語や連語関係に関する知識は習得が比較的遅い」と共起語などの習得の困難さを示唆した。

学習者の共起表現やコロケーション習得について、英語に関する研究は数多いが、日本語を扱った論文は少ない。滝沢(1999)および小森(2003)は「英語を母語とする日本語学習者は母語のコロケーション知識を使う」という傾向を指摘したが、調査文数と語数が少なく、十分な解明に至っていない。杉浦・朴(2003)は、日本語学習者の作文とそれを日本語母語話者が自然な日本語に書き換えた作文からなるパラレルコーパスを用いて、Nグラム的手法で母語話者と学習者の共起表現を比較したが、質的な面で全体的な傾向や共起表現の特徴に対する分析は十分ではない。

本稿は曹・仁科(2006)を踏まえて、学習者と母語話者の共起表現の量的及び質的な特徴を明らかにし、学習者の共起表現の誤用パターンを解明する。

3. 調査概要

3.1. 調査形式

学習者の母語中国語と第二言語日本語では漢字という共通の表記記号がある以上、投野(1997)の対訳というテスト形式は漢字の影響を免れないため、本調査は出題に制限されないように自由連想の形式をとった。連想は意味の下位区分として、心理学などでよく利用される。母語話者の単語からの連想は同義語・反義語・上下関係にある語・コロケーションなどがあり、また統語的な連想も見られることがわかる。本調査では連想のなかの「統語的な連想」に限定して共起表現を入手する。この形式により、語の用法と語の意味の両方のテストになると考えられる。

刺激語の選定にあたって、学習者のレベルを問わず全員理解できる語を提示するために、日本語能力試験(注:非日本語母語話者を対象とする日本語の試験で、4級から1級へとレベルが高くなる)4級の名詞に限定した。『日本語教育のための基本語語彙調査』

(1984)[2]の基本語彙との一致度の得点が上位を占める語を選び、語の意味分類のバランスを考慮した上で、名詞70語を選出した。

3.2. 調査方法

本調査は学習者67名(F29 M38、平均24歳)と母語話者69名(F28 M41、平均29歳)に協力してもらった。学習者は全員日本国内の大学や日本語学校に在籍している。母語話者の90%以上は大学院生か大学生である。なお、学習者の日本語のレベルは全員日本語能力試験3級以上であるが、学習時間などの学習情報に関する調査紙の結果によって、学習者は上位組19名、中位組23名、下位組25名からなることがわかった。

調査協力者には、名詞を提示し、名詞の修飾語又は述語になりうる形容詞か形容動詞をできるだけ多く記入してもらった。バイアスを防ぐために名詞をランダムに提示し、また調査意図を明確に理解してもらうために、学習者には中国語版の説明を付けた。このような調査を通して、形容詞の連体用法及び終止用法の共起表現が収集できる。調査の提示例を下に示す。

例1 あし(足)が___。() () ()

例2 ___おさけ(お酒)() () ()

4. 調査結果

4.1. データ概要

調査データから、対象外となる表現を除外して集計した結果、学習者と母語話者の産出した連体用法の表現(Mと称する)と終止用法の表現(Pと称する)のそれぞれの延べ数と異なり数を表1に示す。その中で、学習者の表現の異なり数の抽出にあたり、語と語の組合せが自然かどうかという基準で、学習者の表現を自然な表現(正用と称する)と不自然な表現(誤用と称する)に分ける。その正用の異なり数も表1に示す。なお、表現の正誤判定に関して、母語話者4名に協力してもらった。

量的に比較すると、延べ数も異なり数も学習者より母語話者のほうが多い。特に誤用を含む表現の異なり数はそれほど差がないように見えるが、表現中の誤用などを除くと、差はかなり大きくなる。この数字からも母語話者は学習者より産出した表現にバラエティがあり、豊かであることがわかる。

表1 学習者Cと母語話者Jの産出表現数

	M	P	合計
J延べ	6839	6914	13753
C延べ	5889	5894	11783
J異なり	2227	1863	4090
C異なり(誤用含)	2013	1713	3726
C異なり(正用)	1656	1540	3196

学習者と母語話者の産出した具体的な表現を把握するために、4.2で対照分析し、4.3で学習者の誤用の詳細を説明する。

4.2. 学習者と母語話者の対照

学習者と母語話者は同じ名詞にどのぐらいの語を産出したか、またどのような語を産出したかを観察するために、70の名詞のそれぞれの産出結果の異なり数を集計した。異なり数の多い名詞と少ない名詞の内訳は表2に示す。

表2の産出総数から、産出数の多い上位の語には抽象名詞が多く、産出数の少ない下位の語には具体名詞が多いという連想の全体的な特徴がわかる。また、学習者と母語話者では数の差はある程度あるものの、上位から下位への名詞の分布は同じ傾向を示している。学習者にとっては、第二言語の言葉そのものはわからなくても、概念はすでに持っているため、母語話者と同じ連想の特徴を示したと考えられる。

次は、名詞別の産出量の差に注目して、母語話者の表現数から学習者の表現数を引いた差の値を計算する。差の値の上位の場合、母語話者は学習者より表現が多いことを意味し、下位の場合、学習者は母語話者より表現が多いことを意味している。全表現数の差の上位名詞5語と下位名詞5語の内訳を表3に示し、連体表現と終止表現別の結果は表4と表5に示す。

表2 学習者Cと母語話者Jの産出異なり数の内訳

上位6語	大人	自分	言葉	話	音楽	絵
産出数	203	195	154	153	151	144
内訳	C 103	C 97	C72	C80	C72	C 64
	J 100	J 98	J 82	J73	J79	J 80
下位6語	荷物	庭	池	空	海	冬
産出数	61	71	75	75	77	77
内訳	C 28	C 33	C 35	C 34	C 36	C 42
	J 33	J 38	J 40	J 41	J 41	J 35

表3 学習者Cと母語話者Jの産出した全表現の差

	n分類	n分類番号	n	J-C
全表現数の差の上位名詞(n)5語	職業	1241	先生	24
	国	1253	国	21
	伝達	1312	ニュース	20
	飲料	1435	たばこ	17
	美術	1322	絵	16
全表現数の差の下位名詞(n)5語	話	1313	話	-7
	水	1513	水	-7
	季節	1162	冬	-7
	色	1502	緑	-12
	老少	1205	子供	-13

J-C:母語話者の全表現数-学習者の全表現数

表4 学習者Cと母語話者Jの産出した連体表現の差

	n分類	n分類番号	n	JM-CM
連体表現数の差の上位名詞(n)5語	事務所,市場	1264	会社	20
	伝達	1312	ニュース	18
	意味,問題	1307	意味	17
	飲料	1435	たばこ	15
	頭,目鼻	1571	顔	15
連体表現数の差の下位名詞(n)5語	水	1513	水	-9
	門	1442	階段	-9
	色	1502	緑	-10
	スポーツ	1337	スポーツ	-10
	老少	1205	子供	-17

JM-CM:母語話者の連体表現数-学習者の連体表現数

表5 学習者Cと母語話者Jの産出した終止表現の差

	n分類	n分類番号	n	JP-CP
終止表現数の差の上位名詞(n)5語	植物	1551	木	14
	職業	1241	先生	14
	家具	1447	机	13
	季節	1162	秋	9
	音楽	1323	音楽	9
終止表現数の差の下位名詞(n)5語	輪・車	1415	車	-4
	からだ	1570	体	-6
	話	1313	話	-8
	店・旅館	1265	店	-8
	頭・目鼻	1571	顔	-9

JP-CP:母語話者の終止表現数-学習者の終止表現数

表3,4,5中の学習者表現には誤用も含まれるため、一概にはいえないが、名詞の分類項目から見れば、全体的な傾向として、色・水・季節のような自然物や自然現象に対する感覚や、職業・老少・伝達のような人間活動に関する概念の違いは学習者と母語話者の連想結果に影響を与えると思われる。連想は文化の影響を受けると言われているが、これについて具体例を通して検証する。

抽象名詞の産出数が多いことは前述したが、学習者と母語話者の違いを考察するために、表6に「大人」、表7に「自分」の想起させる形容詞の頻度を示す。

表6 「大人」の連想表現

JM	JM頻度	CM	CM頻度
立派な	8	やさしい	7
汚い	5	立派な	7
優しい	5	おとなしい	25
うるさい	4	いい	4
悪い	3	おもしろい	4
JP	JP頻度	CP	CP頻度
多い	16	優しい	7
少ない	11	厳しい	3
悪い	11	恐い	3
うるさい	8	ずるい	3
きらいだ	5	成熟	3

表7 「自分」の連想表現

JM	JM 頻度	CM	CM 頻度
明るい	7	さびしい	4
暗い	5	強い	4
ダメな	4	やさしい	4
若い	4	弱い	4
嫌いな	3	かわいい	3
JP	JP 頻度	CP	CP 頻度
かわいい	15	好きだ	8
嫌いだ	14	大人しい	4
好きだ	13	嫌いだ	4
悪い	12	優しい	4
正しい	5	かわいい	3

表8 四季を表す言葉の産出結果(異なり)の内訳

	CM	CP	JM	JP	合計
春	27	27	39	28	121
夏	22	22	25	26	95
秋	30	27	34	36	127
冬	20	22	16	19	77

表9 春・秋の連想表現

	JM	JM 頻度	CM	CM 頻度
春	暖かい	19	暖かい	15
	早い	10	美しい	5
	短い	9	鮮やかな	4
	遅い	8	きれいな	4
	寒い	6	涼しい	4
JP	JP 頻度	CP	CP 頻度	
春が	待遠しい	9	暖かい	25
	短い	9	きれいだ	13
	好きだ	7	短い	9
	近い	6	美しい	7
	早い	5	好きだ	4
JM	JM 頻度	CM	CM 頻度	
秋	涼しい	13	涼しい	23
	短い	6	きれいな	8
	美しい	5	寒い	8
	静かな	5	美しい	7
	小さい	5	寂しい	5
JP	JP 頻度	CP	CP 頻度	
秋が	好きだ	12	涼しい	15
	深い	11	きれいだ	5
	短い	10	爽やかだ	5
	近い	9	好きだ	4
	長い	8	短い	4

表6と表7では、連体表現(M)においては多少頻度の差があるとはいえ、偏りはそれほどない。一方、終止表現(P)では母語話者は一定の語に集中して使用する傾向が見えた。また高頻度で用いられる語の差異からそれぞれの文化背景および思考様式の違いが窺える。次は四季に対する感覚は国によってかなり違うことを想定し、季節を表す名詞の産出表現にも焦点を当てた。表8は春・夏・秋・冬の産出表現の異なり数であるが、

表10 出現したadjの難易度

	4級	3級	2級	1級	級外
C特有 254語	16	11	82	37	108
J特有 339語	7	13	49	56	214
CJ共通 334語	73	42	125	44	50
基準中 adj 語数	85	49	229	261	

母語話者の春に対する連体表現が多いことが目立つ以外に、異なり数には大きな差がない。そこで、具体的な産出語の頻度に差があるかを見る必要がある。学習者も母語話者も春・秋の共起表現を多く産出したことから、春・秋の頻度上位5の表現を表9に示す。

春について、母語話者は「待ち遠しい、短い、早い、遅い」のような時間に関する表現を多用するのに対して、学習者は春を描写する「美しい、きれいな」などのような語を多用する。一方、秋の連想表現では、春と同じ傾向を示しただけではなく、「小さい秋」のような日本語の中の慣用表現の産出があり、母語話者の文化背景を反映していると言える。

最後に、日本語教育の立場から、70の名詞に共起する形容詞および形容動詞の難易度のレベルを『日本語能力試験出題基準』(2004)[1]に従ってチェックする。学習者と母語話者の産出表現に出現した形容詞および形容動詞の異なり927語をレベル分けしたのち、学習者と母語話者それぞれ特有の語および両者共通の語のレベルの内訳を表10に示している。表中のadjは形容詞および形容動詞を表す。学習者(C)特有の254語中、級外となる108語には1級より難易度の高い語もあれば、学習者の誤用により判定不能な語も入っている。学習者のこのような特有の語は不自然な表現と関係がありそうである。また、予想通り母語話者(J)は難易度の高い語を多用している、例えば「薫り高い」や「重苦しい」のような複合形容詞、「荒々しい」や「仰々しい」のような「～しい語」および外来語が挙げられる。なお、学習者と母語話者に共通する語には難易度の低い4級と3級の語でほとんどが占められる。

4.3. 学習者の誤用の分析

学習者の終止用法(P)の表現1713中の誤用は173で、連体用法(M)の表現2013中の誤用は357である。

表11 学習者の誤用表現の内訳 数(%)

誤用パターン	Mの数	Pの数
(1) 共起	151(42%)	79(46%)
(2) 造語	31(9%)	18(10%)
(3) 漢字の移用	15(4%)	7(4%)
(4) 文化と文学	8(2%)	12(7%)
(5) 品詞の誤り	84(24%)	26(15%)
(6) 使用制限	44(12%)	22(13%)
(7) 「的」語の誤り	24(7%)	9(5%)
合計	357(100%)	173(100%)

表 11 は誤用表現の 7 パターンとそれぞれの量を示している。7 パターンの説明と具体例は下記通りである。

(1) 共起

語と語の組合せそのものが不自然である表現で、思考様式や中国語的比喩による中国語の影響や、字面による誤った理解が考えられる。例：「大きい雨、涼しい水、頭が利口だ、天気が良い」

(2) 造語

造語の“もと”としての日本語の単語がある場合、或いは中国語の漢字言葉をそのまま日本語として使う場合である。例：「しおい水、毒い薬、新築な建物、水がにごい、時間が急い」

(3) 漢字の移用

字面から誤った理解、中国語の漢字をそのまま利用する表現である。例えば「細い」との混同で産出した「細かい木」、「苦い」との混同によって産出した「葉が苦しい」などである。また中国語の“粗”の「ふとい」意味で「粗い木」を産出したり、中国語の“下流”（下品という意味）で「下流な絵」を産出したりする。

(4) 文化・文学

「おいしい犬、黄色い秋、時間が正直だ」のような文化的背景のある表現や文学的な表現である。

(5) 品詞の誤り

名詞や動詞などを形容動詞として使う表現である。例：「雑種な犬、乾燥な天気/冬、充実な秋、大人が成熟だ」

(6) 使用制限

「多い雨、多いお金、多い家庭」などのような統語上使用制限のある「多い」が中心となる。また条件付で成立する可能性を含む表現もある。例：「痛いおなか、深い秋、少ない問題、もったいないお金」

(7) 「的」語の誤り

「的」語とは「的」をつける形容動詞のことである。

「友達が善良的だ」のような「的」の過剰使用や、「抽象な絵」のような「的」の欠落や、「希望的な春」「体格的な体」のような誤った表現が挙げられる。

誤用の多い名詞には、中国語と日本語において意味が同じで修飾語が異なる語が最も多く、例えば「雨、風、山、おなか、頭」のような語である。次は名詞の意味範疇の違いによって修飾語が異なる「家庭、緑、水、階段」のような語である。最後に名詞の意味は同じだが、文化背景や思考様式によって修飾語が異なる語として、「自分、大人、お金、秋、春」などが挙げられる。

一方、誤用の多い形容詞では、「多い」が修飾語にならないという使用制限によって生じる誤用が目立つ。また「大きい、小さい、高い、低い、ふとい、広い、深い」のような属性形容詞の誤用も多数ある。基本的

な形容詞であるなら語義数も多く、語義数の多さによって共起相手も複雑になり、学習者にとっては使い分けが困難となる。このことから、困難さを軽減するために、基本的な形容詞の共起表現による細かい意味分析の研究が必要だと考えられる。

学習者の誤用から学習ストラテジーも観察できた。中国語の文字としての漢字を読むことは、視覚的な処理を伴うこととなり、視覚によって意味が認識できる。したがって、中国語を母語とする学習者として、視覚的な処理を優先することが考えられ、日本語の学習においても単語の漢字を視覚的に記憶し、中国語で持っている知識を用いて日本語の単語を理解する可能性がある。例えば学習者は「危ない」と「危うい」を「危険」と同様に記憶したり、「清」という漢字から「清い」と「清らか」と「清々しい」を同じように理解したりする例がある。これには母語の正の転移が働いていながら、誤った理解などによる負の転移も考えられる。また視覚的な漢字を重視する一方その読み方を軽視する傾向によって読み方を覚えられないこともある。

5. 考察

産出した表現から学習者と母語話者の語彙知識の差異を考察すると、学習者は成人としてすでに概念を知っているため、連想結果は母語話者と類似し、具体名詞より抽象名詞の連想語の量が多い傾向がある。しかし、名詞の概念分類によって、学習者と母語話者の間で産出結果の差の大きい語も多く、これは両者の異なる文化背景と関連すると考えられる。またこの結果は成人としての第二言語学習者の特徴とも言える。質的な対照のために、名詞「大人」、「自分」、「春」、「秋」の 4 語を例として挙げた。この 4 つの名詞の産出結果において、学習者と母語話者はそれぞれ異なる特徴があり、文化の影響を反映した。学習者が自然な表現に近づくということは、このような文化的な連想も含むことになると考えられる。

なお、本調査のデータを集計する際、形容詞および形容動詞に限定したため、対象外となる表現を除外したが、問題設定の形式上、母語話者のデータで除外したものには自然な表現も少なくない。例えば品詞を指定したにもかかわらず、母語話者のデータには動詞のタ形やテイル形などの修飾用法は多数ある。これは日本語自身の特性を反映しているのみならず、母語話者には品詞という概念より先に用法を重視して自然な表現を産出したことも考えられる。

また「形容詞或いは形容動詞」という指定は学習者にとって、制限されて産出することになり、誤用を導く懸念もあると思われる。しかし、このような誤用の生じやすい状況にあるため、学習者は第二言語の語彙

知識を最大限に利用し、逃避などによって産出されにくい表現も産出されることになる。そのため、誤用が発見しやすくなり、学習者誤用のパターン化に役立つ。

学習者の誤用表現には日本語の特性に影響されて産出されたものもある。日本語では副詞の一部としての擬音語・擬態語は形容詞の性質がありながら、活用などは形容詞と異なる。擬音語・擬態語は形容詞を補っている。そのため、学習者の擬音語・擬態語を形容詞のように活用して使う現象が目立つと考えられる。また、日本語では一部の“形容詞的な意味”を表わす語は形容詞や形容動詞ではなく、動詞になっている。例えば「太った」と対応して「太い」はあるが、「やせた」と対応する「やせい」はない。したがって学習者の類推による造語「やせい」も存在し、また「太い」と「太る」を混同して使用してしまう傾向もある。これ以外には「にごった」「しゃれた」「かれた」などの語も挙げられる。

6. まとめ

本稿は、中国人日本語学習者と日本語母語話者を対象に行った共起表現の産出調査のデータを分析して、学習者と母語話者の共起表現の異同を考察し、学習者の誤用のパターンを抽出した。その結果を次の6点にまとめる。

- (1) 産出量については、産出表現の延べ数も異なり数も学習者より母語話者のほうが多いことがわかり、先行研究と同じ結論となった。
- (2) 名詞別の産出表現の異なり数に関しては、学習者は母語話者と同じように、具体名詞より抽象名詞の連想結果の量が多い傾向がある。しかし、名詞の概念分類によって、学習者と母語話者の間で産出表現の差の大きい語も多い。
- (3) 名詞「大人」、「自分」、「春」、「秋」の4語を例として産出結果の形容詞のそれぞれの頻度を考察し、学習者と母語話者はそれぞれ異なる特徴があり、連想結果は文化の影響を反映することを証明した。特に「春、秋」には母語話者は時間に関する表現を多用する一方、学習者は具体的な描写の表現を多用する。
- (4) 産出結果としての形容詞および形容動詞の難易度のレベルを分けた。学習者と母語話者に共通して使用する語は基本語である。母語話者特有の語には難易度の高い語が多く、複合形容詞や外来語も目立つ。学習者特有の語には学習者の造語などもあり、不自然な表現と関係する。
- (5) 学習者の誤用は共起、造語、漢字の移用、文化・文学、品詞の誤り、使用制限、「的」語の誤りの7パターンに分けられる。また学習者の誤用表現に

は日本語の特性に影響されたものも多い。

- (6) 学習者の誤用から「視覚的な処理を優先する」という学習者のストラテジーを発見した。これには母語の正の転移が働いていながら、誤った理解などによる負の転移も考えられる。

以上の結果から学習者の習得に影響を与えている問題点が発見でき、これらの問題点を認識した上で教授法を改善すれば効果的だと思われる。

[謝辞] 本研究の調査において、宇都宮大学鎌田美千子先生、大阪大学村岡貴子先生、北九州市立大学池田隆介先生、九州工業大学アブドウハン恭子先生、淑徳日本語学校澤谷孝志先生、東京工業大学小島聡先生と野原佳代子先生、および数多くの学生の皆様に協力いただいたことに感謝の意を表す。

[付記] 本研究は、東京工業大学21世紀COEプログラム「大規模知識資源の体系化と活用基盤構築」(代表者：古井貞照)の助成を受けて行った。

文 献

- [1] 国際交流基金、日本国際教育協会、“日本語能力試験出題基準改訂版,” 凡人社, 東京, 2004.
- [2] 国立国語研究所, “国立国語研究所報告 78, 日本語教育のための基本語彙調査,” 秀英出版, 東京, 1984.
- [3] 小森早江子, “英語を母語とする日本語学習者の語彙のコロケーションに関する研究,” 第二言語としての日本語の習得研究, 第6号, PP.33-51, 2003.
- [4] 曹紅荃, 仁科喜久子, “中国人学習者の作文誤用例から見る共起表現の習得及び教育への提言-名詞と形容詞及び形容動詞の共起表現について-,” 日本語教育, No.130, PP.70-79, July 2006.
- [5] 杉浦正利, 朴秀智, “日本語学習者作文コーパスにおける形態素レベルでの共起表現について,” 日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究, 名古屋大学国際言語文化研究科, PP.1-10, 2003.
- [6] 滝沢直宏, “コロケーションに関わる誤用-日本語学習者の作文コーパスに見られる英語母語話者の誤用例から-,” 日本語学習者の作文コーパス: 電子化による共有資源化, 名古屋大学国際言語文化研究科, PP.77-89, 1999.
- [7] 投野由紀夫編著, “英語教育研究リサーチ・デザイン・シリーズ⑦英語語彙習得論-ボキャブラリー学習を科学する,” 河原社, 東京, 1997.
- [8] 松野和子, 杉浦正利, “コロケーションの定義-コロケーションの概念と判定基準に関する考察-,” なぜ英語母語話者は英語学習者が話すのを聞いてすぐに母語話者ではないとわかるのか, 名古屋大学大学院国際開発研究科, PP.79-95, 2004.
- [9] 松本順子, 堀場裕紀江, 鈴木秀明, 小林ひとみ, “L2 日本語学習者の語彙習得一知識の広さと深さの観点から-,” 言語学会第八回年次国際大会, PP.115-120, 2006.
- [10] Nation I.S.P. Learning Vocabulary in Another Language, New York, Cambridge University Press, 2001.